

## 練習問題と解答 (6 章～ 10 章)

1 平均  $\mu$ , 分散  $\sigma^2$  の正規分布の密度関数は

$$f(x; \mu, \sigma^2) = \frac{1}{\sqrt{2\pi\sigma^2}} e^{-\frac{1}{2\sigma^2}(x-\mu)^2}$$

で与えられる。 $X_1, X_2, \dots, X_n$  は互いに独立で, しかも, それぞれは平均  $\mu$ , 分散  $\sigma^2$  の正規分布に従うものとする。このとき, 次の問に答えよ。

- (1) 平均  $\mu$ , 分散  $\sigma^2$  の最尤推定量を求めよ。
- (2)  $\sigma^2$  の最尤推定量は不偏推定量であるかどうかを調べよ。もし,  $\sigma^2$  の最尤推定量が不偏推定量でないときは, 不偏推定量を求めよ (最尤推定量をもとにして考えればよい)。
- (3) 帰無仮説  $H_0: \mu = \mu_0$  を, 尤度比検定によって, 検定したい。どのようにすればよいかを説明せよ。

[解答]

(1) 平均  $\mu$ , 分散  $\sigma^2$  の最尤推定量を求める。

$$\begin{aligned} & f(x_1, x_2, \dots, x_n; \mu, \sigma^2) \\ &= \prod_{i=1}^n f(x_i; \mu, \sigma^2) \\ &= \prod_{i=1}^n \frac{1}{\sqrt{2\pi\sigma^2}} \exp\left(-\frac{1}{2\sigma^2}(x_i - \mu)^2\right) \\ &= (2\pi\sigma^2)^{-n/2} \exp\left(-\frac{1}{2\sigma^2} \sum_{i=1}^n (x_i - \mu)^2\right) \\ &= l(\mu, \sigma^2) \end{aligned}$$

対数をとる。(最大化しやすくなる場合が多い)

$$\log l(\mu, \sigma^2) = -\frac{n}{2} \log(2\pi) - \frac{n}{2} \log(\sigma^2)$$

$$-\frac{1}{2\sigma^2} \sum_{i=1}^n (x_i - \mu)^2$$

対数尤度関数  $\log l(\mu, \sigma^2)$  を  $\mu$  と  $\sigma^2$  について微分して、ゼロと置く。

$$\begin{aligned} \frac{\partial \log l(\mu, \sigma^2)}{\partial \mu} &= \frac{1}{\sigma^2} \sum_{i=1}^n (x_i - \mu) \\ &= 0 \end{aligned}$$

$$\begin{aligned} \frac{\partial \log l(\mu, \sigma^2)}{\partial \sigma^2} &= -\frac{n}{2\sigma^2} + \frac{1}{2\sigma^4} \sum_{i=1}^n (x_i - \mu)^2 \\ &= 0 \end{aligned}$$

この 2 つの連立方程式を解く。

$$\mu = \frac{1}{n} \sum_{i=1}^n x_i = \bar{x}$$

$$\sigma^2 = \frac{1}{n} \sum_{i=1}^n (x_i - \mu)^2 = \frac{1}{n} \sum_{i=1}^n (x_i - \bar{x})^2$$

$\mu, \sigma^2$  の最尤推定量は,

$$\bar{X}, \quad S^{**2} = \frac{1}{n} \sum_{i=1}^n (X_i - \bar{X})^2$$

となる。

(2)  $\sigma^2$  の最尤推定量  $S^{**2}$  は不偏推定量であるかどうかを調べる。

$$\begin{aligned} E(S^{**2}) &= E\left(\frac{1}{n} \sum_{i=1}^n (X_i - \bar{X})^2\right) \\ &= \frac{1}{n} E\left(\sum_{i=1}^n (X_i - \bar{X})^2\right) \end{aligned}$$

$$\begin{aligned}
&= \frac{1}{n} \mathbf{E} \left( \sum_{i=1}^n ((X_i - \mu) - (\bar{X} - \mu))^2 \right) \\
&= \frac{1}{n} \mathbf{E} \left( \sum_{i=1}^n ((X_i - \mu)^2 \right. \\
&\quad \left. - 2(X_i - \mu)(\bar{X} - \mu) \right. \\
&\quad \left. + (\bar{X} - \mu)^2) \right) \\
&= \frac{1}{n} \mathbf{E} \left( \sum_{i=1}^n (X_i - \mu)^2 \right. \\
&\quad \left. - 2(\bar{X} - \mu) \sum_{i=1}^n (X_i - \mu) \right. \\
&\quad \left. + n(\bar{X} - \mu)^2 \right)
\end{aligned}$$

$$\begin{aligned}
&= \frac{1}{n} \mathbf{E} \left( \sum_{i=1}^n (X_i - \mu)^2 \right. \\
&\quad \left. - 2n(\bar{X} - \mu)^2 + n(\bar{X} - \mu)^2 \right) \\
&= \frac{1}{n} \mathbf{E} \left( \sum_{i=1}^n (X_i - \mu)^2 - n(\bar{X} - \mu)^2 \right) \\
&= \frac{1}{n} \mathbf{E} \left( \sum_{i=1}^n (X_i - \mu)^2 \right) \\
&\quad - \frac{1}{n} \mathbf{E} (n(\bar{X} - \mu)^2) \\
&= \frac{1}{n} \sum_{i=1}^n \mathbf{E} ((X_i - \mu)^2) \\
&\quad - \mathbf{E} ((\bar{X} - \mu)^2)
\end{aligned}$$

$$\begin{aligned}
&= \frac{1}{n} \sum_{i=1}^n V(X_i) - V(\bar{X}) \\
&= \frac{1}{n} \sum_{i=1}^n \sigma^2 - \frac{\sigma^2}{n} \\
&= \sigma^2 - \frac{1}{n} \sigma^2 \\
&= \frac{n-1}{n} \sigma^2 \\
&\neq \sigma^2
\end{aligned}$$

なので、 $S^{**2}$  は  $\sigma^2$  の不偏推定量ではない。

$S^{**2}$  をもとにして、 $\sigma^2$  の不偏推定量を求める。

$$E(S^{**2}) = \frac{n-1}{n} \sigma^2$$

なので、両辺に  $\frac{n}{n-1}$  をかけて、

$$\frac{n}{n-1} \mathbf{E}(S^{**2}) = \sigma^2$$

を得る。

よって、

$$\frac{n}{n-1} S^{**2} = \frac{1}{n-1} \sum_{i=1}^n (X_i - \bar{X})^2 = S^2$$

が  $\sigma^2$  の不偏推定量となる。

(3) 帰無仮説  $H_0: \mu = \mu_0$  を、尤度比検定によって、検定する。

尤度比

$$\lambda = \frac{\max_{\sigma^2} l(\mu_0, \sigma^2)}{\max_{\mu, \sigma^2} l(\mu, \sigma^2)} = \frac{l(\mu_0, \tilde{\sigma}^2)}{l(\hat{\mu}, \hat{\sigma}^2)}$$

について、制約の数は 1 なので、

$$-2 \log \lambda \longrightarrow \chi^2(1)$$

となる。

ここで、 $l(\mu, \sigma^2)$  は、

$$l(\mu, \sigma^2) = (2\pi\sigma^2)^{-n/2} \exp\left(-\frac{1}{2\sigma^2} \sum_{i=1}^n (x_i - \mu)^2\right)$$

であり、 $\log l(\mu, \sigma^2)$  は、

$$\begin{aligned} \log l(\mu, \sigma^2) &= -\frac{n}{2} \log(2\pi) - \frac{n}{2} \log(\sigma^2) \\ &\quad - \frac{1}{2\sigma^2} \sum_{i=1}^n (x_i - \mu)^2 \end{aligned}$$

である。

分子について：

$\mu = \mu_0$  のもとで， $\log l(\mu_0, \sigma^2)$  を  $\sigma^2$  について最大化する。

$$\frac{\partial \log l(\mu_0, \sigma^2)}{\partial \sigma^2} = -\frac{n}{2} \frac{1}{\sigma^2} + \frac{1}{2\sigma^4} \sum_{i=1}^n (x_i - \mu_0)^2 = 0$$

この解が  $\tilde{\sigma}^2$  である。したがって，

$$\tilde{\sigma}^2 = \frac{1}{n} \sum_{i=1}^n (x_i - \mu_0)^2$$

を得る。よって， $l(\mu_0, \tilde{\sigma}^2)$  は，

$$\begin{aligned} & l(\mu_0, \tilde{\sigma}^2) \\ &= (2\pi\tilde{\sigma}^2)^{-n/2} \exp\left(-\frac{1}{2\tilde{\sigma}^2} \sum_{i=1}^n (x_i - \mu_0)^2\right) \end{aligned}$$

$$= (2\pi\tilde{\sigma}^2)^{-n/2} \exp\left(-\frac{n}{2}\right)$$

となる。

分母について：

問 (1) より，

$$\hat{\mu} = \frac{1}{n} \sum_{i=1}^n x_i$$

$$\hat{\sigma}^2 = \frac{1}{n} \sum_{i=1}^n (x_i - \hat{\mu})^2$$

を得る。よって， $l(\hat{\mu}, \hat{\sigma}^2)$  は，

$$l(\hat{\mu}, \hat{\sigma}^2)$$

$$\begin{aligned}
&= (2\pi\hat{\sigma}^2)^{-n/2} \exp\left(-\frac{1}{2\hat{\sigma}^2} \sum_{i=1}^n (x_i - \hat{\mu})^2\right) \\
&= (2\pi\hat{\sigma}^2)^{-n/2} \exp\left(-\frac{n}{2}\right)
\end{aligned}$$

となる。

したがって、

$$\begin{aligned}
\lambda &= \frac{\max_{\sigma^2} l(\mu_0, \sigma^2)}{\max_{\mu, \sigma^2} l(\mu, \sigma^2)} \\
&= \frac{l(\mu_0, \tilde{\sigma}^2)}{l(\hat{\mu}, \hat{\sigma}^2)}
\end{aligned}$$

$$\begin{aligned}
&= \frac{(2\pi\tilde{\sigma}^2)^{-n/2} \exp\left(-\frac{n}{2}\right)}{(2\pi\hat{\sigma}^2)^{-n/2} \exp\left(-\frac{n}{2}\right)} \\
&= \left(\frac{\tilde{\sigma}^2}{\hat{\sigma}^2}\right)^{-n/2}
\end{aligned}$$

よって、近似的に、

$$-2 \log \lambda = n(\log \tilde{\sigma}^2 - \log \hat{\sigma}^2) \sim \chi^2(1)$$

となる。

$-2 \log \lambda > \chi_{\alpha}^2(1)$  のとき、有意水準  $\alpha$  で、帰無仮説  $H_0: \mu = \mu_0$  を棄却する。 $\chi_{\alpha}^2(1)$  は自由度 1 のカイ二乗分布の  $100 \times \alpha$  % 点とする。

2 次問に答えよ。

- (1) 離散型確率変数  $X$  がベルヌイ分布に従うとき、その確率関数は次の式で表される。

$$f(x) = p^x(1-p)^{1-x} \quad x = 0, 1$$

このベルヌイ分布から抽出された大きさ  $n$  の無作為標本を  $X_1, X_2, \dots, X_n$  とするとき、 $p$  の最尤推定量を求めなさい。

- (2)  $Y$  を二項分布  $f(y)$  に従う確率変数とする。このとき、 $\frac{Y}{n}$  は、 $n$  が大きくなると、 $p$  に近づくことを証明せよ。ただし、二項分布は

$$f(y) = {}_n C_y p^y (1-p)^{n-y} \quad y = 0, 1, 2, \dots, n$$

で与えられる。

- (3) 問 (2) の確率変数  $Y$  について、確率変数  $Z_n \equiv \frac{Y - np}{\sqrt{np(1-p)}}$  を定義する。このとき、 $n$  が大きくなるにつれて、 $Z_n$  は標準正規分布に近づくことを証明せよ。

(4) 連続型確率変数  $X$  の密度関数が

$$f(x) = \begin{cases} \frac{1}{2^{\frac{n}{2}}\Gamma(\frac{n}{2})} x^{\frac{n}{2}-1} e^{-\frac{x}{2}}, & x > 0 \text{ のとき} \\ 0, & \text{その他} \end{cases}$$

とする。 $\frac{X}{n}$  は、 $n \rightarrow \infty$  のとき、1 に近づくことを示せ。ただし、 $\Gamma(a)$  はガンマ関数であり、

$$\Gamma(a) = \int_0^{\infty} x^{a-1} e^{-x} dx$$

と定義される。

[解答]

(1) 離散型確率変数  $X$  がベルヌイ分布に従うとき、その確率関数は次の式

で表される。

$$f(x; p) = p^x(1 - p)^{1-x} \quad x = 0, 1$$

このベルヌイ分布から抽出された大きさ  $n$  の無作為標本を  $X_1, X_2, \dots, X_n$  とするとき,  $p$  の最尤推定量を求める。

$$\begin{aligned} & f(x_1, x_2, \dots, x_n; p) \\ &= \prod_{i=1}^n f(x_i; p) \\ &= \prod_{i=1}^n p^{x_i}(1 - p)^{1-x_i} \\ &= p^{\sum_i x_i} (1 - p)^{n - \sum_i x_i} \\ &= l(p) \end{aligned}$$

対数をとる。

$$\begin{aligned} & \log l(p) \\ &= \left( \sum_i x_i \right) \log(p) + \left( n - \sum_i x_i \right) \log(1 - p) \end{aligned}$$

対数尤度関数  $\log l(p)$  を  $p$  について微分して、ゼロと置く。

$$\begin{aligned} \frac{d \log l(p)}{dp} &= \frac{\sum_i x_i}{p} - \frac{n - \sum_i x_i}{1 - p} \\ &= \frac{\sum_i x_i - np}{p(1 - p)} \\ &= 0 \end{aligned}$$

この方程式を解く。

$$p = \frac{1}{n} \sum_{i=1}^n x_i = \bar{x}$$

$p$  の最尤推定量は,

$$\hat{p} = \frac{1}{n} \sum_{i=1}^n X_i = \bar{X}$$

となる。

(2)  $Y$  を二項分布  $f(y)$  に従う確率変数とするととき,  $\frac{Y}{n}$  は,  $n$  が大きくなると,  $p$  に近づくことを証明する。

$Y$  の平均, 分散は,

$$E(Y) = np, \quad V(Y) = np(1 - p)$$

なので,

$$E\left(\frac{Y}{n}\right) = \frac{1}{n}E(Y) = p$$
$$V\left(\frac{Y}{n}\right) = \frac{1}{n^2}V(Y) = \frac{p(1 - p)}{n}$$

となる。

チェビシェフの不等式：

確率変数  $X$  と  $g(x) \geq 0$  について、

$$P(g(X) \geq k) \leq \frac{E(g(X))}{k}$$

となる。  $k > 0$  とする。

ここで、  $g(X) = (X - E(X))^2$ ,  $k = \epsilon^2$  とすると、

$$P(|X - E(X)| \geq \epsilon) \leq \frac{V(X)}{\epsilon^2}$$

を得る。 $\epsilon > 0$  とする。

$X$  を  $\frac{Y}{n}$  に置き換えて、そのままチェビシエフの不等式を当てはめると、

$$P\left(\left|\frac{Y}{n} - E\left(\frac{Y}{n}\right)\right| \geq \epsilon\right) \leq \frac{V\left(\frac{Y}{n}\right)}{\epsilon^2}$$

すなわち、 $n \rightarrow \infty$  のとき、

$$P\left(\left|\frac{Y}{n} - p\right| \geq \epsilon\right) \leq \frac{p(1-p)}{n\epsilon^2} \rightarrow 0$$

となる。したがって、

$$\frac{Y}{n} \rightarrow p$$

を得る。

(3)  $n$  個の無作為標本  $X_1, X_2, \dots, X_n$  はそれぞれ独立に、同一のベルヌイ分布に従うものとする。ただし、 $P(X_i = x) = p^x(1-p)^{1-x}$ ,  $x = 0, 1$  とする。

$Y = X_1 + X_2 + \dots + X_n$  を定義すると、 $Y$  は二項分布に従うので、 $\frac{Y}{n}$  は標本平均とみなすことができる。

$$\text{すなわち, } \frac{Y}{n} = \frac{1}{n} \sum_{i=1}^n X_i$$

よって、 $E\left(\frac{Y}{n}\right) = p$ ,  $V\left(\frac{Y}{n}\right) = p(1-p)/n$  を用いて、中心極限定理により、 $n \rightarrow \infty$  のとき、

$$\frac{\frac{Y}{n} - p}{\sqrt{p(1-p)/n}} \rightarrow N(0, 1)$$

を得る。

$$Z_n \equiv \frac{Y - np}{\sqrt{np(1-p)}} = \frac{\frac{Y}{n} - p}{\sqrt{p(1-p)/n}}$$

なので,

$$Z_n \longrightarrow N(0, 1)$$

を得る。

(4)  $X \sim \chi^2(n)$  のとき,

$E(X) = n$ ,  $V(X) = 2n$  となるので,

$E\left(\frac{X}{n}\right) = 1$ ,  $V\left(\frac{X}{n}\right) = \frac{2}{n}$  となる。

チェビシェフの不等式を当てはめる。

$$P\left(\left|\frac{X}{n} - E\left(\frac{X}{n}\right)\right| \geq \epsilon\right) \leq \frac{V\left(\frac{X}{n}\right)}{\epsilon^2}$$

$\epsilon > 0$  とする。すなわち、 $n \rightarrow \infty$  のとき、

$$P\left(\left|\frac{X}{n} - 1\right| \geq \epsilon\right) \leq \frac{2}{n\epsilon^2} \rightarrow 0$$

となる。したがって、

$$\frac{X}{n} \rightarrow 1$$

を得る。

**3** 指数分布から生成された  $n$  個の互いに独立な確率変数  $X_1, X_2, \dots, X_n$  を考える。ただし、指数分布とは次の分布である。

$$f(x) = \lambda e^{-\lambda x} \quad x > 0$$

で与えられる。このとき、次の問に答えよ。

(1)  $\lambda$  最尤推定量を  $\hat{\lambda}$  とするとき、 $\hat{\lambda}$  を求めよ。

(2)  $n$  が大きいとき、 $\hat{\lambda}$  の平均、分散を求めよ。

[解答]

(1)  $X_1, \dots, X_n$  は互いに独立で、指数分布  $f(x)$  に従うので、尤度関数  $l(\lambda)$  は

$$\begin{aligned} L(\lambda) &= \prod_{i=1}^n f(x_i) \\ &= \prod_{i=1}^n \lambda e^{-\lambda x_i} \\ &= \lambda^n e^{-\lambda \sum x_i} \end{aligned}$$

対数尤度関数は

$$\log l(\lambda) = n \log(\lambda) - \lambda \sum_{i=1}^n x_i$$

$\log l(\lambda)$  を最大にするような  $\lambda$  を求める。

$$\frac{d \log l(\lambda)}{d\lambda} = \frac{n}{\lambda} - \sum_{i=1}^n x_i = 0$$

を解いて、 $x_i$  を  $X_i$  で置き換えて、 $\lambda$  の最尤推定量  $\hat{\lambda}$  は

$$\hat{\lambda} = \frac{n}{\sum_{i=1}^n X_i}$$

となる。

(2)  $n$  個の無作為標本  $X_1, X_2, \dots, X_n$

$X_i$  の密度関数  $f(X_i; \lambda)$

母数  $\lambda$  の最尤推定量  $\hat{\lambda}_n$  について,  $n \rightarrow \infty$  のとき,

$$\sqrt{n}(\hat{\lambda}_n - \lambda) \rightarrow N(0, \sigma^2)$$

となる。ただし,

$$\sigma^2 = \sigma^2(\lambda) = \frac{1}{\mathbf{E} \left[ \left( \frac{d \log f(\mathbf{X}; \lambda)}{d\lambda} \right)^2 \right]}$$

とする。

まず,  $\sigma^2 = \sigma^2(\lambda)$  を求める。

$$\begin{aligned} & \mathbf{E} \left[ \left( \frac{d \log f(\mathbf{X}; \lambda)}{d\lambda} \right)^2 \right] \\ &= \mathbf{E} \left[ \left( \frac{1}{\lambda} - \mathbf{X} \right)^2 \right] \end{aligned}$$

$$\begin{aligned}
&= \mathbf{E} \left( \frac{1}{\lambda^2} - \frac{2}{\lambda} X + X^2 \right) \\
&= \frac{1}{\lambda^2} - \frac{2}{\lambda} \mathbf{E}(X) + \mathbf{E}(X^2) \\
&= \frac{1}{\lambda^2}
\end{aligned}$$

$\mathbf{E}(X)$ ,  $\mathbf{E}(X^2)$  は

$$\mathbf{E}(X) = \frac{1}{\lambda}, \quad \mathbf{E}(X^2) = \frac{2}{\lambda^2}$$

となる。

したがって、

$$\sigma^2 = \sigma^2(\lambda) = \frac{1}{\mathbf{E} \left[ \left( \frac{d \log f(X; \lambda)}{d\lambda} \right)^2 \right]} = \lambda^2$$

よって、 $n$  が大きいとき、

$$\hat{\lambda}_n \sim N\left(\lambda, \frac{\lambda^2}{n}\right)$$

と近似して用いる。

4  $X_1, X_2, \dots, X_n$  の  $n$  個の確率変数は、それぞれ独立に、平均  $\mu$ 、分散  $\sigma^2$  の分布をするものとする。次のような 2 つの  $\mu$  の推定量  $\bar{X}$ ,  $\widetilde{X}$  を考える。

$$\bar{X} = \frac{1}{n} \sum_{i=1}^n X_i \qquad \widetilde{X} = \frac{1}{2}(X_1 + X_n)$$

このとき、次の問に答えよ。

- (1)  $\bar{X}$ ,  $\widetilde{X}$  は不偏性を持つかどうかを調べよ。
- (2)  $\bar{X}$ ,  $\widetilde{X}$  のどちらが有効かを調べよ。

(3)  $\bar{X}$ ,  $\widetilde{X}$  の一致性について調べよ。

[解答]

(1)  $\bar{X}$ ,  $\widetilde{X}$  は不偏性を持つかどうかを調べる。

$$\begin{aligned} E(\bar{X}) &= E\left(\frac{1}{n} \sum_{i=1}^n X_i\right) \\ &= \frac{1}{n} E\left(\sum_{i=1}^n X_i\right) \\ &= \frac{1}{n} \sum_{i=1}^n E(X_i) \\ &= \frac{1}{n} \sum_{i=1}^n \mu \\ &= \mu \end{aligned}$$

$$\begin{aligned} E(\widetilde{X}) &= \frac{1}{2}(E(X_1) + E(X_n)) \\ &= \frac{1}{2}(\mu + \mu) \\ &= \mu \end{aligned}$$

よって、両方とも  $\mu$  の不偏推定量である。

(2)  $\overline{X}$ ,  $\widetilde{X}$  のどちらが有効かを調べる。

$$\begin{aligned} V(\overline{X}) &= V\left(\frac{1}{n} \sum_{i=1}^n X_i\right) \\ &= \frac{1}{n^2} V\left(\sum_{i=1}^n X_i\right) \\ &= \frac{1}{n^2} \sum_{i=1}^n V(X_i) \end{aligned}$$

$$\begin{aligned}
 &= \frac{1}{n^2} \sum_{i=1}^n \sigma^2 \\
 &= \frac{\sigma^2}{n}
 \end{aligned}$$

$$\begin{aligned}
 V(\bar{X}) &= \frac{1}{4}(V(X_1) + V(X_n)) \\
 &= \frac{1}{4}(\sigma^2 + \sigma^2) \\
 &= \frac{\sigma^2}{2}
 \end{aligned}$$

なので、 $n > 2$  のとき、 $V(\bar{X}) < V(\tilde{X})$  となり、 $\bar{X}$  が  $\tilde{X}$  より有効となる。

(3)  $\bar{X}$ ,  $\tilde{X}$  の一貫性について調べる。

チェビシェフの不等式を当てはめる。 $\bar{X}$  について,

$$P(|\bar{X} - E(\bar{X})| \geq \epsilon) \leq \frac{V(\bar{X})}{\epsilon^2}$$

$\epsilon > 0$  とする。すなわち,  $n \rightarrow \infty$  のとき,

$$P(|\bar{X} - \mu| \geq \epsilon) \leq \frac{\sigma^2}{n\epsilon^2} \rightarrow 0$$

となる。したがって,

$$\bar{X} \rightarrow \mu$$

を得る。

一方,  $\tilde{X}$  について,

$$P(|\tilde{X} - E(\tilde{X})| \geq \epsilon) \leq \frac{V(\tilde{X})}{\epsilon^2}$$

$\epsilon > 0$  とする。すなわち、 $n \rightarrow \infty$  のとき、

$$P(|\widetilde{X} - \mu| \geq \epsilon) \leq \frac{\sigma^2}{2\epsilon^2} > 0$$

となる。

$\overline{X}$  は  $\mu$  の一致推定量であるが、 $\widetilde{X}$  は一貫性はない。

5 正規母集団  $N(\mu, \sigma^2)$  から 9 個の無作為標本  
21 23 32 20 36 27 26 28 30  
が得られた。このとき、次の各問に答えなさい。

- (1)  $\mu$  と  $\sigma^2$  の不偏推定値を求めよ。
- (2) 信頼係数 0.90 および 0.95 の  $\mu$  の信頼区間を求めよ。
- (3) 帰無仮説  $H_0 : \mu = 24$  を対立仮説  $H_1 : \mu > 24$  に対して有意水準 0.10 および 0.05 で検定しなさい。

[解答]

(1)  $\mu$  と  $\sigma^2$  の不偏推定量  $\bar{X}$ ,  $S^2$  は

$$\bar{X} = \frac{1}{n} \sum_{i=1}^n X_i, \quad S^2 = \frac{1}{n-1} \sum_{i=1}^n (X_i - \bar{X})^2$$

で、不偏推定値は

$$\bar{x} = \frac{1}{n} \sum_{i=1}^n x_i, \quad s^2 = \frac{1}{n-1} \sum_{i=1}^n (x_i - \bar{x})^2$$

である。

$$\begin{aligned} \bar{x} &= \frac{1}{n} \sum_{i=1}^n x_i \\ &= \frac{1}{9}(21 + 23 + 32 + 20) \end{aligned}$$

$$\begin{aligned} &+36 + 27 + 26 + 28 + 30) \\ &= 27 \end{aligned}$$

$$\begin{aligned} s^2 &= \frac{1}{n-1} \sum_{i=1}^n (x_i - \bar{x})^2 \\ &= \frac{1}{8} \left( (21 - 27)^2 + (23 - 27)^2 + (32 - 27)^2 \right. \\ &\quad \left. + (20 - 27)^2 + (36 - 27)^2 + (27 - 27)^2 \right. \\ &\quad \left. + (26 - 27)^2 + (28 - 27)^2 + (30 - 27)^2 \right) \\ &= \frac{1}{8} (36 + 16 + 25 + 49 \\ &\quad + 81 + 0 + 1 + 1 + 9) \\ &= 27.25 \end{aligned}$$

(2)  $\mu$  の信頼区間を求める。

$$\frac{\bar{X} - \mu}{S/\sqrt{n}} \sim t(n-1),$$

を利用する。

$$P\left(\left|\frac{\bar{X} - \mu}{S/\sqrt{n}}\right| < t_{\alpha/2}(n-1)\right) = 1 - \alpha$$

$t_{\alpha/2}(n-1)$  は  $100 \times \frac{\alpha}{2} \%$  点で、確率  $\alpha$  と自由度  $n-1$  が与えられると、 $t$  分布表から得られる。

したがって、

$$\begin{aligned} P\left(\bar{X} - t_{\alpha/2}(n-1)\frac{S}{\sqrt{n}} < \mu < \bar{X} + t_{\alpha/2}(n-1)\frac{S}{\sqrt{n}}\right) \\ = 1 - \alpha \end{aligned}$$

$\bar{X}, S^2$  を  $\bar{x}, s^2$  で置き換えて,

信頼係数  $1 - \alpha$  の  $\mu$  の信頼区間： $\implies$

$$\left(\bar{x} - t_{\alpha/2}(n-1) \frac{s}{\sqrt{n}}, \bar{x} + t_{\alpha/2}(n-1) \frac{s}{\sqrt{n}}\right)$$

さらに,  $\bar{x} = 27, s^2 = 27.25, n = 9, t_{0.05}(8) = 1.860, t_{0.025}(8) = 2.306$  なので,

信頼係数 0.90 の  $\mu$  の信頼区間は,

$$\begin{aligned} & \left(27 - 1.860 \sqrt{\frac{27.25}{9}}, 27 + 1.860 \sqrt{\frac{27.25}{9}}\right) \\ & = (23.76, 30.24) \end{aligned}$$

となり, 信頼係数 0.95 の  $\mu$  の信頼区間は,

$$\begin{aligned} & \left(27 - 2.306 \sqrt{\frac{27.25}{9}}, 27 + 2.306 \sqrt{\frac{27.25}{9}}\right) \\ & = (22.99, 31.01) \end{aligned}$$

となる。

- (3) 帰無仮説  $H_0 : \mu = 24$  を対立仮説  $H_1 : \mu > 24$  に対して有意水準 0.10 および 0.05 で検定する。

$\bar{X}$  の分布は、 $\frac{\bar{X} - \mu}{S/\sqrt{n}} \sim t(n-1)$  なので、帰無仮説  $H_0 : \mu = \mu_0$  が

正しいもとで、 $\frac{\bar{X} - \mu_0}{S/\sqrt{n}} \sim t(n-1)$  となる ( $\mu$  を  $\mu_0$  で置き換える)。

このとき、検定統計量  $\frac{\bar{X} - \mu_0}{S/\sqrt{n}}$ 。検定統計量の値  $\frac{\bar{x} - \mu_0}{s/\sqrt{n}}$ 。

対立仮説  $H_1 : \mu > \mu_0$  (片側検定) について：

$P\left(\frac{\bar{X} - \mu_0}{S/\sqrt{n}} > t_\alpha(n-1)\right) = \alpha$  なので、

$\frac{\bar{x} - \mu_0}{s/\sqrt{n}} > t_\alpha(n-1)$  のとき、

有意水準  $\alpha$  で  $H_0: \mu = \mu_0$  を棄却する。

$\bar{x} = 27, s^2 = 27.25, \mu_0 = 24, n = 9, t_{0.10}(8) = 1.397, t_{0.05}(8) = 1.860$  を当てはめると,

$$\frac{\bar{x} - \mu_0}{s/\sqrt{n}} = \frac{27 - 24}{\sqrt{27.25/9}} = 1.724 > t_{0.10}(8) = 1.397 \text{ となり, 有意水準}$$

0.10 で  $H_0: \mu = 24$  を棄却する。

$$\frac{\bar{x} - \mu_0}{s/\sqrt{n}} = \frac{27 - 24}{\sqrt{27.25/9}} = 1.724 < t_{0.05}(8) = 1.860 \text{ となり, 有意水準}$$

0.05 で  $H_0: \mu = 24$  を棄却しない。

6 平均  $\mu$ , 分散が既知で  $\sigma^2 = 2^2$  である正規母集団から 16 個の無作為標本  $X_1, X_2, \dots, X_{16}$  を抽出し, その標本平均を計算したところ,  $\bar{x} = 36$  であった。このとき, 次の各問に答えよ。

(1) 平均  $\mu$  の信頼係数 0.95 の信頼区間を求めよ。

- (2) 帰無仮説  $H_0 : \mu = 35$  を対立仮説  $H_1 : \mu = 36.5$  に対して、有意水準 0.05 で検定せよ。
- (3) 問 (2) で行った検定の検出力を求めよ。

[解答]

- (1) 平均  $\mu$  の信頼係数 0.95 の信頼区間を求める。

$\bar{X}$  の分布は

$$\frac{\bar{X} - \mu}{\sigma/\sqrt{n}} \sim N(0, 1),$$

となる。

$$P\left(\left|\frac{\bar{X} - \mu}{\sigma/\sqrt{n}}\right| < z_{\alpha/2}\right) = 1 - \alpha$$

$z_{\alpha/2}$  は  $100 \times \frac{\alpha}{2}$  % 点で、確率  $\alpha$  が与えられると、正規分布表から得られる。

したがって、

$$P(\bar{X} - z_{\alpha/2} \frac{\sigma}{\sqrt{n}} < \mu < \bar{X} + z_{\alpha/2} \frac{\sigma}{\sqrt{n}}) = 1 - \alpha$$

$\bar{X}$  を  $\bar{x}$  で置き換えて、

信頼係数  $1 - \alpha$  の  $\mu$  の信頼区間： $\implies$

$$(\bar{x} - z_{\alpha/2} \frac{\sigma}{\sqrt{n}}, \bar{x} + z_{\alpha/2} \frac{\sigma}{\sqrt{n}})$$

$\bar{x} = 36$ ,  $\sigma^2 = 2^2$ ,  $n = 16$ ,  $z_{0.025} = 1.960$  を代入すると、

平均  $\mu$  の信頼係数 0.95 の信頼区間は、

$$(36 - 1.960 \frac{2}{\sqrt{16}}, 36 + 1.960 \frac{2}{\sqrt{16}}) = (35.02, 36.98)$$

となる。

(2) 帰無仮説  $H_0 : \mu = 35$  を対立仮説  $H_1 : \mu = 36.5$  に対して、有意水準 0.05 で検定する。

$\bar{X}$  の分布は、 $\frac{\bar{X} - \mu}{\sigma/\sqrt{n}} \sim N(0, 1)$  なので、帰無仮説  $H_0 : \mu = \mu_0$  が正しいもとで、

$\frac{\bar{X} - \mu_0}{\sigma/\sqrt{n}} \sim N(0, 1)$  となる ( $\mu$  を  $\mu_0$  で置き換える)。このとき、検定

統計量  $\frac{\bar{X} - \mu_0}{\sigma/\sqrt{n}}$ 。検定統計量の値  $\frac{\bar{x} - \mu_0}{\sigma/\sqrt{n}}$ 。

対立仮説  $H_1 : \mu > \mu_0$  (片側検定) について：

$P\left(\frac{\bar{X} - \mu_0}{\sigma/\sqrt{n}} > z_\alpha\right) = \alpha$  なので、 $\frac{\bar{x} - \mu_0}{\sigma/\sqrt{n}} > z_\alpha$  のとき、有意水準  $\alpha$  で帰無仮説  $H_0 : \mu = \mu_0$  を棄却する。

$\bar{x} = 36, \sigma^2 = 2^2, n = 16, z_{0.05} = 1.645$  を代入すると、

$\frac{\bar{x} - \mu_0}{\sigma/\sqrt{n}} = \frac{36 - 35}{2/\sqrt{16}} = 2 > z_\alpha = 1.645$  なので、有意水準  $\alpha = 0.05$  で帰無仮説  $H_0 : \mu = 35$  を棄却する。

(3) 問 (2) で行った検定の検出力を求める。

検出力とは、対立仮説のもとで、帰無仮説を棄却する確率である。

すなわち、帰無仮説  $H_0 : \mu = \mu_0$  のもとで、帰無仮説を棄却する棄却域は、 $P\left(\frac{\bar{X} - \mu_0}{\sigma/\sqrt{n}} > z_\alpha\right) = \alpha$  なので、

$\bar{X} > \mu_0 + z_\alpha\sigma/\sqrt{n}$  となる。

対立仮説  $H_1 : \mu = \mu_1$  のもとで、帰無仮説を棄却する確率を求める。

すなわち、対立仮説  $H_1 : \mu = \mu_1$  のもとで、

$P(\bar{X} > \mu_0 + z_\alpha\sigma/\sqrt{n})$  を求める。

対立仮説  $H_1 : \mu = \mu_1$  のもとで、

$\frac{\bar{X} - \mu_1}{\sigma/\sqrt{n}} \sim N(0, 1)$  となるので,

$$P\left(\frac{\bar{X} - \mu_1}{\sigma/\sqrt{n}} > \frac{\mu_0 - \mu_1}{\sigma/\sqrt{n}} + z_\alpha\right)$$

となる確率を求めればよい。

$\sigma = 2, n = 16, \mu_0 = 35, \mu_1 = 36.5, z_\alpha = 1.645$  を代入すると,

$$P\left(\frac{\bar{X} - \mu_1}{\sigma/\sqrt{n}} > \frac{35 - 36.5}{2/\sqrt{16}} + 1.645\right)$$

$$= P\left(\frac{\bar{X} - \mu_1}{\sigma/\sqrt{n}} > -1.355\right)$$

$= 1 - 0.0877 = 0.9123$  を得る。

( $z_{0.0885} = 1.35, z_{0.0869} = 1.36$  に注意)

7  $X_1, X_2, \dots, X_n$  は互いに独立で、すべて同一のポアソン分布に従う

ものとする。ただし、ポアソン分布の確率関数は

$$P(X = x) = f(x; \lambda) = \frac{\lambda^x e^{-\lambda}}{x!}, \quad x = 0, 1, 2, \dots$$

である。

このとき、次の問に答えよ。

- (1)  $\lambda$  の最尤推定量  $\hat{\lambda}$  を求めよ。
- (2)  $\hat{\lambda}$  は、 $\lambda$  の不偏推定量であることを証明せよ。
- (3)  $\hat{\lambda}$  は、 $\lambda$  の有効推定量であることを証明せよ。
- (4)  $\hat{\lambda}$  は、 $\lambda$  の一致推定量であることを証明せよ。

[解答]

- (1)  $\lambda$  の最尤推定量  $\hat{\lambda}$  を求める。

ポアソン分布の確率関数は、

$$P(X = x) = f(x; \lambda) = \frac{\lambda^x e^{-\lambda}}{x!}, \quad x = 0, 1, 2, \dots$$

なので、尤度関数は、

$$\begin{aligned} l(\lambda) &= \prod_{i=1}^n f(x_i; \lambda) \\ &= \prod_{i=1}^n \frac{\lambda^{x_i} e^{-\lambda}}{x_i!} \\ &= \frac{\lambda^{\sum_{i=1}^n x_i} e^{-n\lambda}}{\prod_{i=1}^n x_i!} \end{aligned}$$

対数尤度関数は、

$$\log l(\lambda) = \log(\lambda) \sum_{i=1}^n x_i - n\lambda - \log\left(\prod_{i=1}^n x_i!\right)$$

となる。

$$\begin{aligned}\frac{\partial \log l(\lambda)}{\partial \lambda} &= \frac{1}{\lambda} \sum_{i=1}^n x_i - n \\ &= 0\end{aligned}$$

これを解いて、 $\lambda$  の最尤推定量  $\hat{\lambda}$  は、

$$\hat{\lambda} = \frac{1}{n} \sum_{i=1}^n X_i = \bar{X}$$

となる。

(2)  $\hat{\lambda}$  は、 $\lambda$  の不偏推定量であることを証明する。

$$E(\hat{\lambda}) = E\left(\frac{1}{n} \sum_{i=1}^n X_i\right)$$

$$\begin{aligned} &= \frac{1}{n} \sum_{i=1}^n \mathbf{E}(X_i) \\ &= \frac{1}{n} \sum_{i=1}^n \lambda \\ &= \lambda \end{aligned}$$

(3)  $\hat{\lambda}$  は、 $\lambda$  の有効推定量であることを証明する。

クラメル・ラオの不等式の等号が成り立つことを証明すればよい。

$$\begin{aligned} \mathbf{V}(\hat{\lambda}) &= \mathbf{V}\left(\frac{1}{n} \sum_{i=1}^n X_i\right) \\ &= \frac{1}{n^2} \sum_{i=1}^n \mathbf{V}(X_i) \end{aligned}$$

$$\begin{aligned}
&= \frac{1}{n^2} \sum_{i=1}^n \lambda \\
&= \frac{\lambda}{n}
\end{aligned}$$

$$\begin{aligned}
&\frac{1}{n\mathbf{E} \left[ \left( \frac{\partial \log f(X; \lambda)}{\partial \lambda} \right)^2 \right]} \\
&= \frac{1}{n\mathbf{E} \left[ \left( \frac{\partial (X \log \lambda - \lambda - \log X!)}{\partial \lambda} \right)^2 \right]} \\
&= \frac{1}{n\mathbf{E} \left[ \left( \frac{X}{\lambda} - 1 \right)^2 \right]}
\end{aligned}$$

$$\begin{aligned}
&= \frac{\lambda^2}{n\mathbf{E}[(X - \lambda)^2]} \\
&= \frac{\lambda^2}{n\mathbf{V}(X)} \\
&= \frac{\lambda^2}{n\lambda} \\
&= \frac{\lambda}{n}
\end{aligned}$$

したがって、

$$\mathbf{V}(\hat{\lambda}) = \frac{1}{n\mathbf{E}\left[\left(\frac{\partial \log f(X; \lambda)}{\partial \lambda}\right)^2\right]}$$

となり、 $\mathbf{V}(\hat{\lambda})$  は、クラメール・ラオの下限に一致する。よって、 $\hat{\lambda}$  は有効推定量である。

(4)  $\hat{\lambda}$  は、 $\lambda$  の一致推定量であることを証明する。

$$E(\hat{\lambda}) = \lambda, \quad V(\hat{\lambda}) = \frac{\lambda}{n}$$

である。チェビシエフの不等式

$$P(|\hat{\lambda} - E(\hat{\lambda})| \geq \epsilon) \leq \frac{V(\hat{\lambda})}{\epsilon^2}$$

に、 $E(\hat{\lambda})$ 、 $V(\hat{\lambda})$  を代入すると、

$$P(|\hat{\lambda} - \lambda| > \epsilon) < \frac{\lambda}{n\epsilon^2} \longrightarrow 0$$

が得られる。したがって、一致性も成り立つ。

8 連続型確率変数  $X_1, X_2, \dots, X_n$  は互いに独立に同一の正規分布に

従うものとする。このとき、以下の間に答えよ。ただし、正規分布の密度関数は

$$f(x) = \frac{1}{\sqrt{2\pi\sigma^2}} e^{-\frac{1}{2\sigma^2}(x-\mu)^2}$$

で表される。

(1) 標本平均  $\bar{X} = \frac{1}{n} \sum_{i=1}^n X_i$  の分布は、平均  $\mu$ 、分散  $\frac{\sigma^2}{n}$  の正規分布に従うことを示せ。

(2)  $Z = \frac{\bar{X} - \mu}{\sigma/\sqrt{n}}$  を定義する。 $Z$  の分布は、平均 0、分散 1 の正規分布に従うことを示せ。

(3) 標本不偏分散  $S^2 = \frac{1}{n-1} \sum_{i=1}^n (X_i - \bar{X})^2$  を考える。 $\frac{(n-1)S^2}{\sigma^2}$  の分布は自由度  $n-1$  のカイ二乗分布であることが知られている。これを利用して、 $S^2$  の平均と分散を求めよ。

ただし、自由度  $m$  のカイ自乗分布の密度関数は、

$$f(x) = \begin{cases} \frac{1}{2^{\frac{m}{2}} \Gamma(\frac{m}{2})} x^{\frac{m}{2}-1} e^{-\frac{x}{2}}, & x > 0 \text{ のとき} \\ 0, & \text{その他} \end{cases}$$

として表される。

(4)  $S^2$  は  $\sigma^2$  の一致推定量であることを示せ。

[解答]

(1) 標本平均  $\bar{X} = \frac{1}{n} \sum_{i=1}^n X_i$  の分布は、平均  $\mu$ 、分散  $\frac{\sigma^2}{n}$  の正規分布に従うことを示す。

積率母関数を利用する。

$X \sim N(\mu, \sigma^2)$  のとき、 $X$  の積率母関数  $\phi(\theta)$  は、

$$\phi(\theta)$$

$$\begin{aligned}
&\equiv \mathbf{E}(e^{\theta X}) \\
&= \int_{-\infty}^{\infty} e^{\theta x} f(x) dx \\
&= \int_{-\infty}^{\infty} e^{\theta x} \frac{1}{\sqrt{2\pi\sigma^2}} e^{-\frac{1}{2\sigma^2}(x-\mu)^2} dx \\
&= \int_{-\infty}^{\infty} \frac{1}{\sqrt{2\pi\sigma^2}} e^{-\frac{1}{2\sigma^2}(x-\mu)^2 + \theta x} dx \\
&= \int_{-\infty}^{\infty} \frac{1}{\sqrt{2\pi\sigma^2}} e^{-\frac{1}{2\sigma^2}(x^2 - 2(\mu + \sigma^2\theta)x + \mu^2)} dx \\
&= \int_{-\infty}^{\infty} \frac{1}{\sqrt{2\pi\sigma^2}} e^{-\frac{1}{2\sigma^2}(x - (\mu + \sigma^2\theta))^2 + (\mu\theta + \frac{1}{2}\sigma^2\theta^2)} dx \\
&= e^{\mu\theta + \frac{1}{2}\sigma^2\theta^2} \int_{-\infty}^{\infty} \frac{1}{\sqrt{2\pi\sigma^2}} e^{-\frac{1}{2\sigma^2}(x - (\mu + \sigma^2\theta))^2} dx \\
&= \exp\left(\mu\theta + \frac{1}{2}\sigma^2\theta^2\right)
\end{aligned}$$

と計算される。積分のところは、 $N(\mu + \sigma^2\theta, \sigma^2)$  の確率密度関数に注意  
よって、 $X_i \sim N(\mu, \sigma^2)$  のとき、 $X_i$  の積率母関数  $\phi_i(\theta)$  は、

$$\phi_i(\theta) = \exp\left(\mu\theta + \frac{1}{2}\sigma^2\theta^2\right)$$

となる。

今、 $\bar{X}$  の積率母関数  $\phi_{\bar{x}}(\theta)$  を考える。

$$\begin{aligned}\phi_{\bar{x}}(\theta) &\equiv \mathbf{E}(e^{\theta\bar{X}}) \\ &= \mathbf{E}(e^{\theta\frac{1}{n}\sum_{i=1}^n X_i}) \\ &= \mathbf{E}\left(\prod_{i=1}^n e^{\frac{\theta}{n}X_i}\right) \\ &= \prod_{i=1}^n \mathbf{E}(e^{\frac{\theta}{n}X_i})\end{aligned}$$

$$\begin{aligned}
&= \prod_{i=1}^n \phi_i\left(\frac{\theta}{n}\right) \\
&= \prod_{i=1}^n \exp\left(\mu\frac{\theta}{n} + \frac{1}{2}\sigma^2\left(\frac{\theta}{n}\right)^2\right) \\
&= \exp\left(\mu\theta + \frac{1}{2}\sigma^2\frac{\theta^2}{n}\right) \\
&= \exp\left(\mu\theta + \frac{1}{2}\frac{\sigma^2}{n}\theta^2\right)
\end{aligned}$$

となり、これは、平均  $\mu$ 、分散  $\sigma^2/n$  の正規分布の積率母関数に一致する。

(2)  $Z = \frac{\bar{X} - \mu}{\sigma/\sqrt{n}}$  の分布は、平均 0、分散 1 の正規分布に従うことを示す。

$\bar{X}$  の積率母関数  $\phi_{\bar{x}}(\theta)$  は、問 (1) より、

$$\begin{aligned}\phi_{\bar{x}}(\theta) &\equiv \mathbf{E}(e^{\theta\bar{X}}) \\ &= \exp\left(\mu\theta + \frac{1}{2} \frac{\sigma^2}{n} \theta^2\right)\end{aligned}$$

と計算されることを利用する。

$Z$  の積率母関数  $\phi_z(\theta)$  は、

$$\begin{aligned}\phi_z(\theta) &\equiv \mathbf{E}(e^{\theta Z}) \\ &= \mathbf{E}\left(\exp\left(\theta \frac{\bar{X} - \mu}{\sigma/\sqrt{n}}\right)\right) \\ &= \exp\left(-\theta \frac{\mu}{\sigma/\sqrt{n}}\right) \mathbf{E}\left(\exp\left(\frac{\theta}{\sigma/\sqrt{n}} \bar{X}\right)\right) \\ &= \exp\left(-\theta \frac{\mu}{\sigma/\sqrt{n}}\right) \phi_{\bar{x}}\left(\frac{\theta}{\sigma/\sqrt{n}}\right)\end{aligned}$$

$$\begin{aligned}
&= \exp\left(-\theta \frac{\mu}{\sigma/\sqrt{n}}\right) \\
&\quad \times \exp\left(\mu \frac{\theta}{\sigma/\sqrt{n}} + \frac{1}{2} \frac{\sigma^2}{n} \left(\frac{\theta}{\sigma/\sqrt{n}}\right)^2\right) \\
&= \exp\left(\frac{1}{2}\theta^2\right)
\end{aligned}$$

これは、 $N(0, 1)$  の積率母関数となっている。

(3) まず、準備として、自由度  $m$  のカイ二乗分布の平均と分散を計算する。

自由度  $m$  のカイ二乗分布は、

$$f(x) = \frac{1}{2^{\frac{m}{2}} \Gamma(\frac{m}{2})} x^{\frac{m}{2}-1} e^{-\frac{x}{2}} \quad x > 0 \text{ のとき}$$

なので、その積率母関数  $\phi_{\chi^2}(\theta)$  は、

$$\phi_{\chi^2}(\theta)$$

$$\begin{aligned}
&= \mathbf{E}(e^{\theta X}) \\
&= \int_0^{\infty} e^{\theta x} \frac{1}{2^{\frac{m}{2}} \Gamma(\frac{m}{2})} x^{\frac{m}{2}-1} e^{-\frac{x}{2}} dx \\
&= \int_0^{\infty} \frac{1}{2^{\frac{m}{2}} \Gamma(\frac{m}{2})} x^{\frac{m}{2}-1} e^{-\frac{1}{2}(1-2\theta)x} dx \\
&= \int_0^{\infty} \frac{1}{2^{\frac{m}{2}} \Gamma(\frac{m}{2})} \left( \frac{y}{1-2\theta} \right)^{\frac{m}{2}-1} e^{-\frac{1}{2}y} \frac{1}{1-2\theta} dy \\
&= \left( \frac{1}{1-2\theta} \right)^{\frac{m}{2}-1} \frac{1}{1-2\theta} \\
&\times \int_0^{\infty} \frac{1}{2^{\frac{m}{2}} \Gamma(\frac{m}{2})} y^{\frac{m}{2}-1} e^{-\frac{1}{2}y} dy \\
&= (1-2\theta)^{-\frac{m}{2}}
\end{aligned}$$

となる。

4つ目の等式で、 $y = (1 - 2\theta)x$  として、置換積分を利用。

$\frac{1}{2^{\frac{m}{2}} \Gamma(\frac{m}{2})} y^{\frac{m}{2}-1} e^{-\frac{1}{2}y}$  は、自由度  $m$  の  $\chi^2$  分布となっているので、その積分値は1となる。

積率母関数を微分して、

$$\phi'_{\chi^2}(\theta) = m(1 - 2\theta)^{-\frac{m}{2}-1}$$

$$\phi''_{\chi^2}(\theta) = m(m + 2)(1 - 2\theta)^{-\frac{m}{2}-2}$$

を用いると、

$$E(X) = \phi'_{\chi^2}(0) = m$$

$$E(X^2) = \phi''_{\chi^2}(0) = m(m + 2)$$

が得られる。

よって、自由度  $m$  の  $\chi^2$  分布の平均は  $m$ 、分散は、

$$\begin{aligned}V(X) &= E(X^2) - (E(X))^2 \\ &= m(m + 2) - m^2 \\ &= 2m\end{aligned}$$

となる。

$\frac{(n-1)S^2}{\sigma^2} \sim \chi^2(n-1)$  なので、これを利用すると、

$$\begin{aligned}E\left(\frac{(n-1)S^2}{\sigma^2}\right) &= n-1 \\ V\left(\frac{(n-1)S^2}{\sigma^2}\right) &= 2(n-1)\end{aligned}$$

となる。よって、

$$\frac{n-1}{\sigma^2} E(S^2) = n-1$$

$$\left(\frac{n-1}{\sigma^2}\right)^2 V(S^2) = 2(n-1)$$

を利用して、 $S^2$  の平均と分散は、

$$E(S^2) = \sigma^2$$

$$V(S^2) = \frac{2\sigma^4}{n-1}$$

となる。

(4)  $S^2$  は  $\sigma^2$  の一致推定量であることを示す。

チェビシエフの不等式を用いる。

$$P(|S^2 - E(S^2)| \geq \epsilon) \leq \frac{V(S^2)}{\epsilon^2}$$

に、 $E(S^2)$ ,  $V(S^2)$  を代入すると、

$$P(|S^2 - \sigma^2| \geq \epsilon) \leq \frac{2\sigma^4}{(n-1)\epsilon^2} \longrightarrow 0$$

が得られる。したがって、一致性も成り立つ。